

GNOMES



仕事の合間にあわてて携帯で予約しておいたホテルに送っていただいた頃にはもう真っ暗になっていた、しかし、もう、着くというときになってきて困った。どうも勘違いしてめったに泊まらないホテルに予約を入れてしまったらしいのだ。その場所を覚えていればいいのだが、どうも何年も前の記憶は裏道でおぼろげな霞のかなたで、結局関係各方面に余計な手数をかけつつやっとたどりついた。大体同じ街で7箇所も携帯に入れておく私が悪かった。

それでも薄暗いフロントのベルを鳴らして出てきたばあさんの顔に見覚えがあった。「いやー、。久しぶりに来たものだから迷ってしまって、近くでぐるぐる回ってきました。」と笑いかけると、「何年ぶりですかねー、で、部屋は立派な方と、安いのもちにするの。」と皺の中の目がますます線になってばあさんが聞く。「そりゃー安いよーだ。また、夜中に帰ってきて朝早く出て行くんだから。」「そうかい、じゃあ、5400円の部屋ね。そーだね、500円負けとくよ、えー

と」としばし暗算して、「現金でいいよね、4750円だね。」とまあ、明快な交渉は成立して、「じゃあ、それでね、ところで、今から飲みに行くんだが門限があったね。」「1時だよ、領収書書いて待ってるから荷物おいてきたら。」「じゃあ、そうしていて。」そんなぶっきらぼうなやり取りが無駄がなくて気持ちがいい。

結局1時少し前によれよれで送ってもらってたどり着くと、今度はじいさんが待っていた。客商売も大変だなと思いつつ、部屋へよたよたとたどり着いた。それにしても昼間は天気が良くてよかった。富士はきれいに良く見えていたし、市内はまだ雪が残っていた。JRはいつのまにか「のぞみ」ばかりになって値上がりして腹立たしかったが、昼は雪の残る400m程の山間の集落を見た。雪がきりりと大気を引き締めていて、遠くまで視線が広がり、実にのびのびとしていた。このおだやかな山と川に恵まれた土地ならおそらく太古の昔から人は心豊かにすごしていただろうと思われた。

で、結局この日は最後はいつものちょっとせのありそうなおねーさん、というか、おばさんの前のカウンターに座って氷にウイスキーをかけてもらっていたのだが、さっきまで、割と朗らかに歌っていたお客さんが帰って、見送りから帰ったおばさんが片付けながらちょっと声を落としてどんな人なんだか言うんだが、そんなときにいつも思うのは、店の人が人を見る目が、人ではなくて肩書きだけをみているなと感じる。仕事だから仕方がないのだが、店が急ににぎやかになるのはまあ、肩書き上で偉い人が入ってきた時で、見ている単純明快である。そんなあとでちょっと煙たそうな疲れた物言いで小さく肩書きを教えられるものだ。本当は、気持ちよく話せる相手かどうかだけでもいいのだが、まあ、そうもいかないのだろう。ちょっと背筋に隙間風が入る一瞬です。などと思いつつ結局ばかはばかなりにマイクを握って「月がとつてもあおいからー。」などとやっている、画面にやたらとイモシヨをされて、それもまあ、プログラムどおりなのかと思うとそれに乗っている自分が情けなく、3曲千円の話などを始めてしまう、まあ、くどいよっぱらい路線をどんどんすすんでいくわけだ。

翌朝、宿の近くの昔かかわった公園のシンとした雪の中をゆっくり歩いた。そこは子供の神様だというが、そういえば今月出した雑誌の原稿が子供の遊具のことを書こうと思って、書き始めたら、「子供はどうやって育っていかねばならないのか、大人は何をしなければならぬのか。」という線を進んで行ってしまったのを思い出した。駅のホームできしめんを食べてなんだか今年も終わったかと思った。

1月の「まなざし」の編集は17日におこないます。手伝いのかたはよろしくお願ひいたします。

<http://www.interq.or.jp/japan/gnomes/gnomes1>

TEL/FAX 03-5600-0195

高村 哲

GnomesJpn@aol.com